

# 狀慘災風旋大面方町綱横所本りよ橋厩

(九其報愛災蒙大部帝)



圖義向回山父青白部藏服校所本

「厩橋より本所横綱町方面大旋風之慘状」(東京消防庁 蔵)



東日本大震災の後、多くの人々は震災の脅威をあらためて痛感している。そこにくっきりと浮かび上がるもう一つの背景が関東大震災の惨禍である。この絵図は、「厩橋より本所横綱町方面大旋風之惨状」である。

厩橋（うまやばし）は、春日通りが隅田川を渡る西岸の蔵前と東岸の本所に架かる橋で、明治26（1893）年に完成した錬鉄製トラス・木製下路床式の橋であった。そのため周辺の市街地からの火の粉や火流、橋上の避難者と家財、橋下の舟荷や漂流破材などの炎上により鉄骨・木製路床は激しく変形・焼損した。元々この橋は明治7（1874）年に地元民が「御厩の渡し」の代わりに造った木造賃取橋であり、現橋より約100m下流にあった。現在の下路式タイドアーチ鉄橋は、関東大震災の復興事業の一環として東京市が昭和4（1929）年に以前の橋を撤去し完成させた三代目である。なお、下流から永代橋、両国橋、厩橋、吾妻橋が各々大きく損壊し通行不能となったが、両国橋の直ぐ下流に架かる新大橋だけは鋼・コンクリート製床であったため機能を維持した。

当時、東京市の橋梁数は675あり、使用材料別の数とその被害率（約％）は鉄橋54（90）、木橋346（60）、鉄筋コンクリート14（25）、コンクリート30（20）、石橋148（5）、その他83（－）であり、鉄橋の被害率が目立っている。木橋の被害率が約60％であるのは、この時代の主たる建設資材は木材であり、火事に遭わなかった木橋も各所に架けられていたためと考えられる。

震災関係諸調査では、本所区本所陸軍被服本廠跡地（以下、「被服廠跡地」という。）では約3万8千人が瞬く間に命を落とした。東京市全体での死者数は約6万人（行方不明者は4万人弱）でありその約65％を占めた。橋関連（橋上や橋詰）では約1,140人が亡くなっている。明暦3年（1657）の大火では、江戸域を守るため神田川に架けられている浅草御門が囚人の逃亡を防ぐという誤報で閉鎖され避難民がパニックを起こし、圧死や川への転落溺死などで約2万3千人が死亡したという。

また、この絵図に見る火災旋風は、震災当日の午後3～4時頃発生したとされ、厩橋から南南東約600mの隅田川（大川）対岸にある被服廠跡地付近にあり、上空へ立ち昇る巨大な渦として描かれ、手前の川辺は燃え上がる横綱町市街、安田庭園（震災の前年、安田善次郎氏から東京市に寄贈）樹々のシルエット、炎上中の旧両国国技館などもかな

り正確な位置で描かれている。この旋風により切り裂かれた樹木の写真は、藤田スケール（竜巻を強度別に分類する等級のこと）でF3クラス（風速約80m/s、約5秒間継続）と推定される旋風による被災状態であるという。

寺田寅彦氏の調査によると被服廠跡地付近で起こった旋風は、厩橋方面から南東へ向かって移動し、約20分間、約7haの被服廠跡地内の地表付近を約1,000℃の熱流が旋回し、家財を抱えた群衆（約0.5人/m<sup>2</sup>）を阿鼻叫喚地獄に陥れた。人は70℃の熱気を15分間吸い込むと致死、80℃では12分間、90℃では9分間ということや、この旋風では一酸化炭素を含む熱煙流であったため一瞬の内に群衆が落命したと考えられる。

旋風の発生については未解明な点も多いが、震災資料の中には被服廠跡地あたりに活発な積乱雲が発生していたことを示す写真がある。これは広域火災による上昇気流によって形成されたとみられる。また、当日午前6時頃には能登半島付近に台風の中心があり、これが日本海側を北東方向に進んでいたため、震災発生時には南から西寄りの風になっていたと考えられ、品川予警報信号所では関東地方は4～5m/secの南寄りの風であったと記録している。積乱雲・台風・火熱流などが火災旋風発生に影響を与えたと考えられ、この絵図では東方向に傾いた旋風として描かれている。

相馬清二氏は、和歌山市空襲火災や自身の実験結果も参考に、火災旋風が生じる主因は、周辺が広域に亘り同時多発火災が発生していること、強風下では発生し難いこと、などを挙げている。筆者は、四面のうち一面が隅田川で熱気流の上昇状況に違いがあり、これが上昇熱流の回転に寄与した一因ではないかと思う。なお、震災調査では火災旋風が約100か所で発生したとされている。絵図の右上には被服廠跡地で白骨の山を回向している様子が挿入されている。

現在、JR総武線両国駅を挟んだ南側には「諸宗山無縁寺回向院」があり、明暦の大火・安政大地震・関東大震災・東京大空襲などでの多くの無縁犠牲者が吊われている。当時、深川に住んでいた祖母は、警察官に指示されてあまりに多くの人々が本所被服廠跡地を目指す状況を見て、近所の人たちに反対方向へ行こうと提案し清澄庭園へ避難して助かったと話し、大空襲の時にもこの体験があったので生き延びられたとよく言っていた。

菅原 進一（東京理科大学 教授）